

〈原著論文〉

愛着スタイルとロールシャッハ反応との関連

特定医療法人清仁会のぞみの丘ホスピタル 後藤 宥乃
中京大学心理学部 明翫 光宜

The relationship between attachment style and the Rorschach response

GOTO, Hirono (Nozominooka hospital)

MYOGAN, Mitsunori (School of psychology, Chukyo University)

In this study, we investigated the relationship between attachment style and Rorschach test variables. A total of 176 university students completed a questionnaire survey consisting of the Experiences in Close Relationships-the generalized other version (ECR-GO); 39 also took part in individual psychological assessments that included the Rorschach test. The results indicated that attachment anxiety was related to self-representation with anxiety in interpersonal contexts and to a tendency to connect to the stimulus (over-adaptive). Furthermore, attachment avoidance was related to a passive response style: the participant refrained from producing an individual response.

Key words: attachment style, Rorschach response, attachment anxiety, attachment avoidance

I 問題と目的

(1) 愛着スタイルと対人関係の関係

Bowlby (1981)によれば、愛着とは、「特定の人物（主な養育者）との強い絆（黒田・吉田・横浜訳 1977, p. 39）」と定義されている。愛着は心理学において、幼児期だけの関係性ではなく、人間が自立性を獲得した大人になっても生涯を通じて持続すると仮定され、その人自身の心的状態あるいは他者との関係のとり方などを説明し得る総合的な概念として扱われ、研究されてきた（川森, 2012）。

Bifulco & Thomas (2017)によると、安定的な愛着関係において、幼児は養育者から安全に守られている体験を心と身体に内在化することによって、自分自身の中にも安心・安全の感覚を育むことができるようになる。一方、不安定な愛着関係は他者に対して不安や不信、緊張などをもたらすだけでなく、自分自身に対しても不安や不信、緊張などをもたらすと言われている。このように、養育者との愛着関係は内的作業モデル（internal working model: IWM）として子どもの心と身体に内在化され、その後の対人関係における行動や知覚、期待や信念を方向付ける心理的メカニズムが形成されていくという（金政, 2003）。

IWMとは、Bowlby (1973)によると、「他者（主に愛着対象）が自分の援助や保護の求めに対して応じ

てくれる人物なのか、自分が他者（特に愛着対象）から援助や保護をしてもらえる人物なのかについての表象（黒田・岡田・吉田訳1977, p.226）」と定義されている。

Bartholomew et al. (1991)は、自己についてのIWMを「自己観」、他者についてのIWMを「他者観」と表現している。加えて、自己観・他者観がそれぞれネガティブかポジティブかによって愛着スタイルを4つに分類する2次元・4類型モデルを提唱した。この成人愛着スタイルを類型化するうえで2つの次元となるのは、自己観のネガティブさに対応する「見捨てられ不安（Anxiety）」と、他者観のネガティブさに対応する「親密性の回避（Avoidance）」という次元である。そして、この2次元の組合せによって成人の愛着スタイルは、自己観・他者観がともにポジティブな「安定型（Secure）」、自己観がポジティブで他者観がネガティブな「拒絶型（Dismissing）」、自己観がネガティブで他者観がポジティブな「とらわれ型（Preoccupied）」、自己観・他者観がともにネガティブな「恐れ型（Fearful）」の4つに分類される。

クライアントの主訴の背景に愛着の問題が潜んでいることを心理臨床家が早い段階でアセスメントできれば、（愛着の問題が心理療法の関係性に反映されることが多いため）愛着の問題からくる関係性の理解とその対応に役立つと思われる。成人の心理ア

セメントにおいてよく使われるロールシャッハ・テストにおいて、愛着スタイルとの関連性を見出すことができれば、愛着スタイルを理解する手がかりとなると筆者らは考えた。

(2) 愛着スタイルとロールシャッハ反応との関連

ロールシャッハ反応における解釈仮説と愛着の関係は古くから検討され、解釈仮説に組み込まれてきた。Klopfer, Kirkner, Wisham & Baker (1951) および空井 (1990) によると、基本的安全感は図版のインクプロットが持つ濃淡と関係が深いとされている。これについて理解するために、Harlow, H. F. の子ザルの実験が挙げられている。この実験は、生後すぐに母親から引き離された子ザルが、母親に抱かれているのと同じ温度の中で、母乳と同じものを飲まされて金網のケージに入れておかれるものである。しかし、そのままでは大抵の子ザルが死に至ってしまう。ところが、やわらかい毛布のような布切れを与えると下痢することなく生きていけるのである。この肌触りの感じがロールシャッハ・テストという濃淡ということになる。そこで「濃淡を反応の中でどのように体験しているか、つまり温かい肌触りとしてか、それとも冷たい岩肌としてかなどを検討することによって、その人の持つ基本的安全感を知ることができる (空井, 1990, p. 113)」。これが、濃淡反応の解釈仮説である。

ロールシャッハ・テストと成人愛着スタイルとの関連については、Cassella (2009) や岩佐 (2011) の研究がある。Cassella (2009) は、成人愛着スタイルとロールシャッハ・テストとの関連を検討した結果、濃淡材質反応 (以下スコア記号であるTと表記する) を一つ産出する者 (T=1に該当する者) は、愛着の安定型と有意に関連している。また、濃淡材質反応を二つ以上産出する者 (T>1に該当する者) は、愛着のとらわれ型と関連している。濃淡材質反応を産出しない者 (T=0に該当する者) については、恐れ型と拒絶型にわかれていることが示された。岩佐 (2011) の成人愛着と濃淡材質反応の研究ではRQ (Relationship Questionnaire) 日本語版と濃淡材質反応との関連をみている。その結果から、T>1の者はT=1の者に比べてとらわれ型の傾向が強く、T=1の者は他の者に比べて安定型の傾向が強くT=0の者は有意傾向ではあるものの、T>1の者よりも愛着軽視型が強い傾向を示すことが明らかとなった。これらの結果は仮説を概ね支持するも

のだったが、T>1の者がT=1の者に比べてとらわれ型の傾向が強いことも示された。また、従来の愛着スタイル尺度では親密な人との関係性を想定した自己記入式であるのに対して一般的他者を想定した愛着スタイル尺度であるECR-GO (the Experiences in Close Relationships inventory the-generalized-other-version) との相関を検討した結果からは、T>1の者はT=0、T=1の者に比べて愛着不安の傾向が強いことが示された。一方で、愛着回避については有意な結果が得られなかった。すなわち、愛着不安に関しては仮説を支持する結果が得られたが、愛着回避については仮説が支持されなかった。これらのことから、日本の濃淡材質反応数の出現頻度の少なさから、T=0群には多様な特性を示す者が含まれ、濃淡材質反応のみで成人愛着スタイルとの関連を検討するのは難しいのではないかと岩佐 (2011) は指摘した。

濃淡材質反応以外のロールシャッハ指標を用いて成人愛着との関連を検討している研究も存在する。Berant, Mikulincer, Shaver & Segal (2005) の研究がある。Berant et al. (2005) は、Mikulincer & Shaver (2003) の愛着の精神力動モデルに基づいて関連するロールシャッハ変数を選択した。Mikulincer & Shaver (2003) のモデルは、自己記入式質問紙の愛着不安・愛着回避の個人差が二次的愛着対処ストラテジー (注) を反映するとした。Berant et al. (2005) は、二次的愛着対処ストラテジーの過活性化に伴う感情・認知的過程 (感情調整不全、反すう、ネガティブな自己モデル、強い依存欲求) を想定した7つのロールシャッハスコア (Afr (感情比率), CF (色彩形態反応), ColShdBld (濃淡色彩ブレンド), Y (濃淡拡散反応), m (無生物運動反応), MOR (損傷反応), Fd (食物反応)) が愛着不安と関連すると仮説を立てた。一方、二次的愛着対処ストラテジーの脱活性化に伴う感情・認知的過程 (対人接近とそれに伴う安心感への欲求の否認、個人—環境間のストレスフルな関係における個人的な関わり合いの回避、自己愛的な外見) を想定した4つのロールシャッハスコア (low FM (動物反応の低さ), high L (形態反応の高さ), Fr + rF (反射反応), Cg (衣服反応)) が愛着回避と関連するという仮説を立て検証し、その仮説は見事に支持された。ここから成人愛着と関連のある指標が濃淡材質反応だけではないことが示されている。しかし、筆者らはBerant et al. (2005) の研究では感情・認知

的過程に仮説をしぼったため、愛着スタイルは対人関係の問題でもあるにも関わらず、採用したロールシャッハ変数に対人関係を仮定している指標が少ないのはなぜかという疑問が残った。

以上のことから、日本では出現率の少ない濃淡材質反応のみで愛着スタイルを検討することに限度があると考えられる。また、Berant et al. (2005)の研究では特定の文化での研究となるため、日本における愛着スタイルとロールシャッハ・テストとの関連を検証し、今後の臨床場面でのロールシャッハ・テストの実用に寄与したい。

II 方法

(1) 調査協力者

質問紙協力者は、A県の大学生176名であった。性別の内訳は男性40名、女性136名であった。平均年齢は19.70歳（SD=2.77）であった。そのうち、個別調査に参加した協力者は39名であった。性別の内訳は男性12名、女性27名であった。平均年齢は21.00歳（SD=5.06）であった。

(2) 手続き

2018年4月中旬に講義終了後に個別調査への参加募集用紙が添付された質問紙を配布し、個別調査の協力者の募集を行った。さらに個別調査への協力の同意を示した協力者については、後日個別調査を実施した。個別調査は2018年5月上旬～2018年11月上旬に実施した。

(3) 質問紙調査

質問紙はフェイスシート、ECR-GO（中尾・加藤，2004）、個別調査への参加募集用紙で構成されていた。フェイスシートには、研究目的、データの取り扱い、調査不参加や途中辞退が可能であること、個人情報の保護について記載し、性別、年齢の記入を求めた。ECR-GOを用いた理由として本研究では大学生を対象としている。愛着スタイルにおいて親密な他者との関係性として青年期では一般的に恋人が想定されるが、個別調査も含めると対象者が限られてしまうため本研究では愛着スタイルを測定する尺度としてECR-GOを用いることにした。

ECR-GO（中尾・加藤，2004）は30項目で構成され、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法であった。下位尺度は愛着不安

18項目、愛着回避12項目で構成され、得点が高いほどそれらの特性が高いと判断される。質問項目については中尾・加藤（2004）になった。

個別調査への参加募集用紙には、研究目的と個別調査への参加募集、調査不参加や途中での辞退が可能であること、個人情報の保護について記載し、連絡先の記入を求めた。

(4) 個別調査

個別調査では、大学の実験室にて、ロールシャッハ・テストを行った。個別調査の実施・記号化は包括システムに準拠してロールシャッハ・テストの経験が15年以上の臨床心理士の指導の下、筆者（後藤）が行った。また、ロールシャッハ・テストのスコアリングの妥当性を確保するため臨床心理士の資格を有する指導者とともに行った。形態水準の評定については基本的にExner（1995）の形態水準評定表に準拠した。また、文化差による影響も考慮して高橋・高橋・西尾（2002）の形態水準表も参照することとした。

(5) 統計的解析

結果の分析は、IBM SPSS Statistics 20[®]を用いた。愛着不安・愛着回避をそれぞれ高群と低群に分け、ロールシャッハ変数における分散の偏りを考慮して正規分布を前提としないU検定を行った。また、愛着不安・愛着回避における濃淡材質反応の度数の比較に関しては χ^2 検定を行った。

(6) 研究の倫理的配慮

本研究の実施においては、中京大学研究倫理審査委員会の承認を得た。個別調査参加者には実施前に、研究目的、研究方法・所要時間、参加辞退の際の不利益防止への配慮、参加辞退の機会保障、個人情報の保護、緊急事態の対応について書面で説明し、以上の研究参加について書面にて同意を得た。

III 結果

(1) 質問紙の基礎データ

本研究における質問紙調査の参加者全員のECR-GOに天井効果及び床効果はみられなかった。愛着不安の平均は63.58（SD=14.98）で、愛着回避の平均は54.56（SD=11.08）であった。中尾・加藤（2004）の平均値と比較すると、愛着回避においては大きな差は

みられなかったが、愛着不安において差がみられた。中尾・加藤 (2004) の研究では平均値が37.65であるのに対して、本研究では平均値が63.58である。ここ数年の研究をみると、古村・村上・戸田 (2016) では愛着不安の平均得点は65.88であった。このことは、中尾・加藤 (2004) の結果を比較すると、愛着不安を示す青年がかなり増えているということを示す。今野・吉川 (2016) によると、アメリカ人よりも日本人の方が安定型を示す割合が小さく、不安定的な愛着スタイルが大多数を占めていることもわかっている。本研究からも同様のことが示され、愛着不安・愛着回避ともに低群に在籍する者は全体の4分の1を占めた。このことから、本研究データの大多数が不安定的な愛着スタイルを示すことが先行研究である今野・吉川 (2016) の研究同様に明らかになった。

Table 1 ECR-GO の下位尺度と Berant et al. (2005) によるロールシャッハ変数との相関関係

	愛着不安	愛着回避
Afr	.024	-.264
CF	.135	-.272
ColShaBld	.127	.021
sumY	.122	-.113
m	.007	-.043
MOR	.359*	-.058
Fd	.046	-.321*
FM	-.066	-.051
Lambda	.027	-.075
Fr+rF	-.386*	-.034
Cg	.265	-.027

*... $p < .05$

(2) 愛着不安・愛着回避と Berant et al. (2005) によるロールシャッハ指標との関連

ECR-GO の下位尺度である愛着不安・愛着回避と Berant et al. (2005) の研究で用いられているロールシャッハ変数との pearson 積率相関係数を算出した (Table 1)。愛着不安では、MOR ($r = .359, p < .05$) との間に有意な正の相関関係が、Fr+rF ($r = -.386, p < .05$) との間に有意な負の相関関係がみられた。また、愛着回避では Fd ($r = -.321, p < .05$) に有意な負の相関関係がみられた。

筆者らは、本研究データと愛着不安・愛着回避とロールシャッハ変数との関連が Berant et al. (2005) によるロールシャッハ指標と大きく異なることに注目した。そこで各ロールシャッハ変数との関連について探索的に pearson 積率相関係数を算出した (Table 2)。愛着不安には自己評価に関連すると考えられている指標 (Fr (反射反応), 3r+(2)/R (自己中心性指標), MOR (損傷反応)) が該当し、愛着回避は認知の三側面 (情報処理・認知的媒介・思考) に関する変数 (情報処理では Dd, S, Zd が、認知的媒介では FQ- が、思考では FAB2) と対人関係に関する変数 (Hd (人間部分反応), Fd (食物反応), PHR (貧質人間表象反応)) が該当した。

(3) 濃淡材質反応との検討

ECR-GO の下位尺度と濃淡材質反応 (T) の関連を検討した。濃淡材質反応についてはロールシャッハ・テストの解釈上、 $T=0, T=1, T>1$ のそれぞれの場合において解釈仮説が明確に異なる。愛着不安・愛着回避の高低群において $T=0, T=1, T>1$ の該当者に偏りがあるのかを検討するため χ^2 検定を行った。結果は、どちらの下位尺度においても有意

Table 2 ECR-GO の下位尺度とロールシャッハ変数との相関関係

	愛着不安	愛着回避		愛着不安	愛着回避
R	.02	-.23	H	.028	.104
W	.034	-.041	(H)	-.028	.267
D	-.047	-.119	Hd	.1	-.320*
Dd	.058	-.319*	(Hd)	-.102	.05
S	.16	-.329*	AllH	.034	.024
DQ+	.192	.119	A	-.168	.045
DQo	-.037	-.246	(A)	.054	-.053
DQv/+	-.248	-.18	Ad	-.042	-.248
DQv	.159	-.182	(Ad)	.136	.079
FQ+	.139	.216	An	-.015	-.29
FQo	.063	-.071	Art	.067	-.216
FQu	.008	-.25	Ay	.05	.035

愛着スタイルとロールシャッハ反応との関連 (後藤 宥乃・明翫 光宜)

	愛着不安	愛着回避		愛着不安	愛着回避
FQ-	-.115	-.335*	Bl	.06	-.091
M	.021	-.067	Bt	.066	-.044
FM	-.066	-.051	Cg	.265	-.027
m	.007	-.043	Ex	-.271	.222
FC	-.021	-.038	Fd	.046	-.321*
CF	.135	-.272	Fi	-.185	-.14
C	.064	.021	Ge	.028	-.249
WSumC	.109	-.175	Hh	-.066	-.05
FC'	.074	-.023	Ls	-.154	-.007
C'F	.138	.048	Na	-.026	-.137
C'	.041	-.144	Sc	.223	-.222
WSumC'	.1	-.023	Sx	.264	-.124
FT	-.164	-.102	Xy	-.187	.065
TF	.291	-.055	Idio	.112	-.015
WSumT	-.074	-.116	INC1	-.11	-.124
FV	-.142	-.144	INC2	.088	.049
VF	-.088	-.15	DR1	.005	-.15
SumV	-.138	-.149	FAB1	-.083	.116
FY	-.049	-.081	FAB2	-.284	.381*
YF	.283	-.151	AB	.235	-.134
Y	.086	.187	AG	.116	-.043
SumY	.122	-.113	COP	.308	-.046
F	.109	-.237	CP	.227	-.005
FD	.097	-.103	MOR	.359*	-.058
Fr	-.461**	-.04	PER	.08	-.209
rF	-.066	-.006	PSV	.099	.012
(2)ベア	.073	-.007	GHR	.121	.249
3r+(2)/R	-.337*	.126	PHR	-.02	-.322*
Lambda	.027	-.075	WSum6	-.146	.06
EA	.094	-.166			
es	.037	-.091			
D	-.024	.11			
AdjD	.037	.07			
a	.004	-.046			
p	-.03	-.125			
Ma	.01	-.041			
Mp	.072	-.083			
Intellect	.19	-.22			
Zf	.035	-.101			
Zd	.087	-.426**			
Afr	.024	-.264			
Popular	-.019	.145			
X+%	.044	.315			
WDA	.18	.204			
XA%	.121	.203			
X-%	-.117	-.212			
Xu%	-.003	-.134			
S-%	-.179	.054			
Isolate	-.055	.087			

*...p<.05 **...p<.01

差は認められなかった（愛着不安： $\chi^2(2)=1.444$, n.s., 愛着回避： $\chi^2(2)=0.914$, n.s.）。それぞれの度数を Table 3 と Table 4 に示す。

Table 3 愛着不安の高低群と材質反応の度数

	T=0	T=1	T>1
高群	12	7	2
低群	10	4	4

Table 4 愛着回避の高低群と材質反応の度数

	T=0	T=1	T>1
高群	12	5	2
低群	10	6	4

(4) 愛着不安・愛着回避と各ロールシャッハ指標との関連

個別調査参加者の ECR-GO の下位尺度である愛着不安の得点が平均値より高い群を高群 (N=21), 低い群を低群 (N=18) とし, 愛着回避の得点が平均値より高い群を高群 (N=19), 低い群を低群

(N=20) とした。各ロールシャッハ変数をそれぞれ 2 群間で U 検定を行い, 効果量 (r) を算出した。その結果を Table 5 と Table 6 に示した。

Table 6 によると, 愛着不安の高群・低群の 2 群間で有意な差がみられたのは, DQ+ (U=110, p<.05, r=.32) と YF (U=110.5, p<.05, r=.39) であり, いずれも高群が高かった。

Table 6 にあるように, 多くの変数で有意差が認められた。高群が有意に低かった変数は, R (U=112, p<.05, r=.35), D (U=102, p<.05, r=.40), Dd (U=74.5, p<.05, r=.52), S (U=94, p<.05, r=.44), FQu (U=111.5, p<.05, r=.35), Zd (U=87, p<.05, r=.46), Afr (U=113.5, p<.05, r=.34), Hd (U=82, p<.05, r=.50), An (U=111.5, p<.05, r=.38), Sc (U=116, p<.05, r=.35), PHR (U=100, p<.05, r=.41) であった。

Table 5 愛着不安の高低群におけるロールシャッハ変数の比較

	高群 (N=21)			低群 (N=18)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
R	29.19	12.62	27.0	30.28	12.81	27.5	n.s.	.04
W	16.29	8.39	14.0	14.17	7.49	12.5	n.s.	.14
D	6.38	6.67	4.0	9.33	7.39	8.0	n.s.	.24
Dd	6.52	6.08	5.0	6.78	4.68	6.0	n.s.	.08
S	3.29	3.89	2.0	2.89	2.65	3.0	n.s.	.03
DQ+	7.38	3.75	8.0	5.17	2.83	5.0	119*	.32
DQo	19.52	12.37	20.0	23.22	10.76	23.5	n.s.	.21
DQv/+	.29	.56	0.0	.72	1.18	0.0	n.s.	.19
DQv	2.0	1.58	2.0	1.17	1.29	1.0	n.s.	.27
FQ+	.52	.98	0.0	.33	.59	0.0	n.s.	.04
FQo	16.29	5.49	17.0	16.17	4.6	16.0	n.s.	.02
FQu	10.24	7.95	7.0	10.83	7.11	10.0	n.s.	.1
FQ-	2.14	2.35	2.0	3.0	2.63	3.0	n.s.	.18
M	3.43	2.01	3.0	3.11	2.14	3.0	n.s.	.09
FM	4.0	2.53	3.0	4.0	3.24	3.5	n.s.	.05
m	2.86	1.49	3.0	2.61	2.75	1.5	n.s.	.17
FC	3.57	2.66	3.0	4.39	3.29	4.0	n.s.	.09
CF	3.29	1.42	3.0	2.61	2.59	2.0	n.s.	.3
C	.52	1.12	0.0	.44	.86	0.0	n.s.	.02
Cn	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
WSumC	5.93	2.52	5.5	5.47	4.38	4.25	n.s.	.18
FC'	4.38	2.94	5.0	4.67	4.03	3.0	n.s.	.02
C'F	.9	1.18	0.0	.56	.86	0.0	n.s.	.14
C'	.14	.48	0.0	.11	.47	0.0	n.s.	.07
WSumC'	5.43	3.7	5.0	5.33	4.78	3.0	n.s.	.09
FT	.38	.59	0.0	.78	1.11	0.0	n.s.	.16
TF	.14	.36	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.26

愛着スタイルとロールシャッハ反応との関連（後藤 宥乃・明翫 光宜）

	高群 (N=21)			低群 (N=18)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
T	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
WSumT	.52	.68	0.0	.78	1.11	0.0	n.s.	.07
FV	.29	.64	0.0	.72	1.27	0.0	n.s.	.21
VF	0.0	0.0	0.0	.06	.24	0.0	n.s.	.17
V	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
SumV	.29	.64	0.0	.78	1.48	0.0	n.s.	.21
FY	2.52	1.57	3.0	3.5	2.57	2.5	n.s.	.14
YF	1.48	1.63	1.0	.56	1.2	0.0	110.5*	.39
Y	.14	.48	0.0	.06	.24	0.0	n.s.	.08
SumY	4.14	2.74	3.0	4.11	3.16	3.0	n.s.	.06
F	10.81	6.82	10.0	10.0	4.37	10.5	n.s.	.03
FD	1.19	1.4	1.0	.67	.59	1.0	n.s.	.13
Fr+rF	.14	.48	0.0	.56	.98	0.0	n.s.	.29
(2)ベア	6.05	2.89	6.0	6.17	2.62	6.0	n.s.	.04
3r+(2)/R	.23	.1	.23	.28	.12	.26	n.s.	.18
Lambda	.65	.53	.53	.63	.45	.4	n.s.	.03
EA	9.36	3.7	9.0	8.58	5.32	7.75	n.s.	.18
es	17.24	8.09	16.0	17.61	12.57	12.5	n.s.	.12
D	-2.1	1.67	-2.0	-2.17	2.12	-1.5	n.s.	.03
AdjD	-.71	1.71	-1.0	-1.11	1.6	-1.0	n.s.	.1
a	7.76	3.28	7.0	6.94	4.35	6.0	n.s.	.15
p	2.43	1.83	2.0	2.67	2.17	2.0	n.s.	.04
Ma	2.52	1.54	2.0	2.28	1.56	2.0	n.s.	.1
Mp	.95	.86	1.0	.83	.99	1.0	n.s.	.11
Intellect	1.76	1.92	1.0	1.06	1.43	1.0	n.s.	.2
Zf	19.1	8.49	19.0	17.56	7.73	15.0	n.s.	.11
Zd	-3.79	6.08	-2.0	-2.86	7.65	-1.5	n.s.	.07
ColShdBld	2.1	1.45	2.0	1.61	2.09	1.0	n.s.	.24
Afr	.47	.15	.46	.51	.19	.46	n.s.	.04
Popular	4.14	1.8	4.0	4.28	1.67	4.0	n.s.	.02
X+%	.61	.13	.64	.58	.15	.56	n.s.	.17
WDA	.94	.07	.95	.91	.08	.91	n.s.	.18
XA%	.93	.07	.95	.91	.08	.91	n.s.	.14
X-%	.07	.07	.05	.09	.08	.09	n.s.	.13
Xu%	.32	.12	.28	.33	.14	.37	n.s.	.12
S-%	.06	.14	0.0	.11	.16	0.0	n.s.	.21
Isolate	.17	.08	.17	.16	.08	.15	n.s.	.05
H	2.86	2.71	2.0	2.28	1.32	2.0	n.s.	.04
(H)	1.52	1.57	1.0	1.56	1.34	1.0	n.s.	.05
Hd	1.95	2.09	1.0	1.94	1.55	2.0	n.s.	.07
(Hd)	.57	1.12	0.0	.89	.76	1.0	n.s.	.31
AllH	6.9	3.63	5.0	6.67	2.4	7.0	n.s.	.01
A	7.81	3.16	7.0	9.67	4.38	8.0	n.s.	.2
(A)	.76	1.0	0.0	.56	.92	0.0	n.s.	.13
Ad	2.86	2.97	2.0	3.61	2.89	3.0	n.s.	.16
(Ad)	.38	1.16	0.0	.28	.67	0.0	n.s.	.03
An	1.05	1.6	1.0	1.44	1.65	1.0	n.s.	.18
Art	1.0	1.18	1.0	.89	1.37	0.0	n.s.	.1
Ay	.29	.56	0.0	.17	.38	0.0	n.s.	.1
Bl	.43	.75	0.0	.28	.57	0.0	n.s.	.12
Bt	2.57	2.31	2.0	2.17	1.62	2.5	n.s.	.01

	高群 (N=21)			低群 (N=18)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
Cg	3.95	2.42	4.0	3.17	1.82	3.5	n.s.	.14
Ex	.29	.56	0.0	.11	.32	0.0	n.s.	.17
Fd	1.14	1.35	1.0	1.11	1.08	1.0	n.s.	.03
Fi	1.29	.96	1.0	1.56	1.72	1.0	n.s.	.01
Ge	.19	.4	0.0	.33	.69	0.0	n.s.	.06
Ls	1.1	1.09	1.0	1.22	1.48	.5	n.s.	.02
Sc	1.57	2.01	1.0	.61	.85	0.0	n.s.	.23
Na	.52	.87	0.0	.56	.86	0.0	n.s.	.02
Xy	.14	.36	0.0	.28	.57	0.0	n.s.	.11
Sx	.05	.22	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.15
Idio	2.67	2.03	2.0	2.06	1.89	1.0	n.s.	.17
DV1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
DV2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
INC1	.81	.87	1.0	1.06	1.26	.5	n.s.	.05
INC2	.05	.22	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.15
DR1	.14	.65	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.15
DR2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
FAB1	.33	.8	0.0	.22	.55	0.0	n.s.	.04
FAB2	0.0	0.0	0.0	.06	.24	0.0	n.s.	.17
ALOG	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
CONTAM	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
AB	.24	.62	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.26
AG	.9	1.04	1.0	.5	.71	0.0	n.s.	.19
COP	.67	.8	0.0	.33	.59	0.0	n.s.	.22
CP	.52	.98	0.0	.22	.55	0.0	n.s.	.15
MOR	1.52	1.54	1.0	.72	1.07	0.0	n.s.	.28
PER	1.38	2.11	0.0	1.17	1.98	0.0	n.s.	.07
PSV	.19	.51	0.0	.06	.24	0.0	n.s.	.15
GHR	4.48	2.48	4.0	3.83	1.69	4.0	n.s.	.11
PHR	3.33	2.03	3.0	3.61	2.83	3.5	n.s.	.02
Sum6	1.33	1.53	1.0	1.33	1.61	.5	n.s.	.05
WSum6	3.57	5.1	2.0	3.39	4.82	1.0	n.s.	.06
S-CON	5.81	1.89	6.0	5.06	1.63	5.0	n.s.	.18
PTI	.05	.22	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.15
DEPI	4.81	1.17	5.0	4.39	1.09	4.0	n.s.	.19
CDI	2.71	1.31	3.0	3.17	.86	3.0	n.s.	.18
HIV	.14	.36	0.0	.17	.38	0.0	n.s.	.03
OBS	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0

*...p<.05 **...p<.01

Table 6 愛着回避の高低群におけるロールシャッハ変数の比較

	高群 (N=19)			低群 (N=20)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
R	25.0	9.09	23.0	34.15	13.92	29.5	112*	.35
W	15.95	7.9	14.0	14.7	8.16	12.5	n.s.	.09
D	5.21	6.01	3.0	10.15	7.31	9.5	102*	.4
Dd	3.84	2.77	4.0	9.3	6.0	8.5	74.5*	.52
S	1.63	1.54	1.0	4.5	3.98	4.0	94*	.44
DQ+	6.32	3.58	6.0	6.4	3.52	6.0	n.s.	.01
DQo	17.0	8.54	14.0	25.25	12.94	22.5	n.s.	.31
DQv/+	.37	.96	0.0	.6	.88	0.0	n.s.	.2
DQv	1.32	1.53	1.0	1.9	1.45	2.0	n.s.	.22
FQ+	.47	.84	0.0	.3	.57	0.0	n.s.	.07
FQo	15.05	5.02	15.0	17.45	4.88	17.5	n.s.	.22
FQu	7.74	5.38	6.0	13.15	8.33	10.0	111.5*	.35
FQ-	1.79	1.51	2.0	3.25	3.02	3.0	n.s.	.23
M	3.0	1.97	2.0	3.55	2.14	3.0	n.s.	.14
FM	3.63	3.09	2.0	4.35	2.6	4.0	n.s.	.19
m	2.58	1.61	3.0	2.9	2.57	2.0	n.s.	0.0
FC	3.26	2.62	2.0	4.6	3.17	4.0	n.s.	.24
CF	2.53	1.43	3.0	3.4	2.46	3.0	n.s.	.16
C	.53	.84	0.0	.45	1.15	0.0	n.s.	.19
Cn	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
WSumC	4.97	2.52	5.5	6.43	4.11	5.25	n.s.	.15
FC'	3.89	3.07	4.0	5.1	3.74	4.0	n.s.	.16
C'F	.58	.9	0.0	.9	1.17	.5	n.s.	.14
C'	.11	.46	0.0	.15	.49	0.0	n.s.	.08
WSumC'	4.58	3.73	4.0	6.15	4.51	5.0	n.s.	.2
FT	.42	.61	0.0	.7	1.08	0.0	n.s.	.09
TF	.05	.23	0.0	.1	.31	0.0	n.s.	.09
T	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
WSumT	.47	.7	0.0	.8	1.06	.5	n.s.	.15
FV	.37	.6	0.0	.6	1.27	0.0	n.s.	.01
VF	0.0	0.0	0.0	.05	.22	0.0	n.s.	.16
V	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
SumV	.37	.6	0.0	.65	1.46	0.0	n.s.	.14
FY	2.47	1.95	2.0	3.45	2.21	3.0	n.s.	.23
YF	.63	1.12	0.0	1.4	1.76	1.0	n.s.	.28
Y	.16	.5	0.0	.05	.22	0.0	n.s.	.11
SumY	3.26	2.31	3.0	4.9	3.28	3.5	n.s.	.27
F	8.58	4.72	9.0	12.2	6.2	12.0	n.s.	.31
FD	.89	.88	1.0	1.0	1.34	1.0	n.s.	.04
Fr+rF	.42	.96	0.0	.25	.55	0.0	n.s.	.03
(2)ベア	5.47	3.03	4.0	6.7	2.34	7.0	n.s.	.31
3r+(2)/R	.28	.12	.27	.23	.1	.22	n.s.	.19
Lambda	.6	.46	.4	.67	.52	.58	n.s.	.08
EA	7.97	3.79	7.5	9.98	4.94	8.5	n.s.	.22
es	14.89	8.3	15.0	19.75	11.56	17.5	n.s.	.21
D	-1.84	1.77	-2.0	-2.4	1.96	-2.0	n.s.	.14
AdjD	-.58	1.54	0.0	-1.2	1.74	-1.0	n.s.	.19
a	7.0	3.89	6.0	7.75	3.74	7.5	n.s.	.09
p	2.11	1.66	2.0	2.95	2.19	2.0	n.s.	.18
Ma	2.32	1.6	2.0	2.5	1.5	2.0	n.s.	.1

	高群 (N=19)			低群 (N=20)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
Mp	.68	.75	1.0	1.1	1.02	1.0	n.s.	.21
Intellect	1.21	1.81	1.0	1.65	1.66	1.0	n.s.	.2
Zf	17.53	7.62	16.0	19.2	8.61	19.0	n.s.	.08
Zd	-6.47	6.8	-8.5	-.4	5.38	-.25	87*	.46
ColShdBld	1.74	1.94	1.0	2.0	1.62	2.0	n.s.	.12
Afr	.42	.15	.4	.55	.17	.5	113.5*	.34
Popular	4.26	1.76	4.0	4.15	1.73	4.0	n.s.	.02
X+%	.65	.15	.63	.55	.12	.53	n.s.	.28
WDA	.93	.07	.94	.92	.08	.94	n.s.	.06
XA%	.92	.07	.94	.91	.08	.92	n.s.	.06
X-%	.08	.07	.06	.09	.08	.08	n.s.	.06
Xu%	.29	.16	.27	.36	.09	.37	n.s.	.28
S-%	.08	.17	0.0	.09	.13	0.0	n.s.	.11
Isolate	.17	.07	.2	.16	.09	.15	n.s.	.14
H	2.58	2.61	2.0	2.6	1.73	2.0	n.s.	.08
(H)	2.05	1.68	2.0	1.05	1.0	1.0	n.s.	.3
Hd	1.0	.88	1.0	2.85	2.06	2.5	82*	.5
(Hd)	.68	1.06	0.0	.75	.91	.5	n.s.	.07
AllH	6.32	3.35	5.0	7.25	2.83	8.0	n.s.	.22
A	8.16	3.64	8.0	9.15	4.04	8.5	n.s.	.12
(A)	.68	.89	0.0	.65	1.04	0.0	n.s.	.08
Ad	2.37	2.01	2.0	4.0	3.45	3.0	n.s.	.22
(Ad)	.32	.67	0.0	.35	1.18	0.0	n.s.	.13
An	.63	.96	0.0	1.8	1.91	1.0	111.5*	.38
Art	.68	1.2	0.0	1.2	1.28	1.0	n.s.	.3
Ay	.21	.42	0.0	.25	.55	0.0	n.s.	0.0
Bl	.37	.76	0.0	.35	.59	0.0	n.s.	.03
Bt	2.21	1.93	2.0	2.55	2.11	2.0	n.s.	.07
Cg	3.21	1.9	4.0	3.95	2.39	3.5	n.s.	.13
Ex	.21	.42	0.0	.2	.52	0.0	n.s.	.06
Fd	.84	1.12	0.0	1.4	1.27	1.0	n.s.	.24
Fi	1.21	1.18	1.0	1.6	1.5	1.0	n.s.	.12
Ge	.05	.23	0.0	.45	.69	0.0	n.s.	.37
Sc	.68	1.6	0.0	1.55	1.61	1.0	116*	.35
Ls	1.11	1.37	1.0	1.2	1.2	1.0	n.s.	.08
Na	.42	.69	0.0	.65	.99	0.0	n.s.	.08
Xy	.16	.5	0.0	.25	.44	0.0	n.s.	.17
Sx	0.0	0.0	0.0	.05	.22	0.0	n.s.	.16
Idio	2.32	1.8	2.0	2.45	2.16	2.0	n.s.	0.0
DV1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
DV2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
INC1	.79	1.03	0.0	1.05	1.1	1.0	n.s.	.13
INC2	.05	.23	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.16
DR1	0.0	0.0	0.0	.15	.67	0.0	n.s.	.16
DR2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
FAB1	.37	.83	0.0	.2	.52	0.0	n.s.	.09
FAB2	.05	.23	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.16
ALOG	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
CONTAM	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0
AB	.16	.5	0.0	.1	.45	0.0	n.s.	.1
AG	.84	1.01	1.0	.6	.82	0.0	n.s.	.12

	高群 (N=19)			低群 (N=20)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
COP	.53	.84	0.0	.5	.61	0.0	n.s.	.06
CP	.42	.84	0.0	.35	.81	0.0	n.s.	.07
MOR	1.0	1.11	1.0	1.3	1.63	0.0	n.s.	.02
PER	.79	1.58	0.0	1.75	2.31	1.0	n.s.	.24
PSV	.16	.5	0.0	.1	.31	0.0	n.s.	.02
GHR	4.53	2.48	4.0	3.85	1.79	4.0	n.s.	.07
PHR	2.47	1.61	3.0	4.4	2.68	4.0	100*	.41
Sum6	1.26	1.63	1.0	1.4	1.5	1.0	n.s.	.08
WSum6	3.63	5.57	2.0	3.35	4.33	2.0	n.s.	.06
S-CON	5.32	1.29	5.0	5.6	2.19	5.5	n.s.	.07
PTI	.05	.23	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	.16
DEPI	4.37	1.34	4.0	4.85	.88	5.0	n.s.	.21
CDI	2.84	1.17	3.0	3.0	1.12	3.0	n.s.	.1
HIV	.16	.37	0.0	.15	.37	0.0	n.s.	.11
OBS	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.s.	0.0

*...p<.05 **...p<.01

IV 考察

(1) 愛着不安・愛着回避とロールシャッハ変数との相関関係

本研究では, Berant et al. (2005) の研究で関連があるとされたロールシャッハ変数との間に一部のみ有意な関連がみられた。さらに Table 2にもあるように本研究のデータからは愛着不安・愛着回避の各特性と関連するロールシャッハ変数が異なることが示された。これらの結果の違いがもたらされた要因として先行研究と本研究において用いた愛着スタイルの尺度の違いが考えらる。Berant et al.(2005)の研究では, 恋人等の親密な関係における愛着不安と愛着回避を想定しているのに対し, 筆者らが用いた心理尺度は一般的な他者との関係における愛着不安と愛着回避を想定している。尺度が想定している他者の違いが関連するロールシャッハ変数の違いをもたらした可能性が考えられ, 両者の違いを有意な相関関係にあったロールシャッハ変数から描き, どのような要因に起因するのか考えてみたい。

Berant et al. (2005) の研究では, 愛着不安は Afr, CF, 濃淡色彩ブレンド, 不安拡散反応, m, MOR, Fd と有意な相関関係がみられた。これらの変数から, 情緒的な反応性の高さ, 不安反応やアンビバレントな感情状態, ストレス, 悲観的思考, 依存性の心理学的意味を汲み取ることが出来る。一方, 愛着回避は, FM, Lamda, Fr+rF, Cg と有意な相関関係があり, これらの変数から自身の欲求の気づきの弱さ, 現実への関与の弱さ, 誇大化され

た自己表象, 自己を隠す傾向があるとしている (Berant et al., 2005)。ここから読み取れるのは, 愛着不安からは対人関係における情緒的問題と傷つき, 愛着回避からは隠れた誇大化された自己愛となる。ここから親密な他者との近い距離感だからこそ起きてくる強い情緒状態とその防衛スタイルがうかがえる。

一方で本研究では, 愛着不安は Fr+rF, 3r+(2)/R, MOR と有意な相関関係がみられた。これらは自己表象に関連する変数である。本研究での愛着不安とは, 一般的他者から見捨てられるかもしれないという不安を示す (中尾・加藤, 2004) ことから, 対人関係全般における自己観がより反映されたと考えられた。一方, 愛着回避では Dd, S, FQ-, Zd, Hd, Fd, PHR と負の相関関係であり, FAB2のみ正の相関関係がみられた。Dd, S, Zd は情報処理, FQ- は認知的媒介, FAB2は思考のクラスターに入る変数であり, まとめて認知の三側面と呼ばれる。ここから愛着回避では Dd など独自性や情報処理のエネルギーをあまりかけない情報処理スタイルが, 知覚の誤り (FQ-) や貧困人間表象 (PHR) の少なさから反応が失敗しないようロールシャッハ課題にコミットせず無難な反応を産出しようとする姿勢がうかがえる。また依存性の解釈が想定される Fd において愛着回避と負の相関関係を示したのは, 対人関係を避けることと依存は相反する動きであるので Fd の解釈仮説の妥当性を支持する結果となった。本研究から, ECR-GO における愛着不安は自己愛や自己概念が強く反映され, 愛着回避

は対人状況にあまりコミットしない反応スタイルが反映された。先行研究と本研究の違いは、想定する他者の対人距離の差から起因するものと考えられた。

(2) ECR-GO の下位尺度と濃淡材質反応について

本研究では、ECR-GO の下位尺度と濃淡材質反応数との間に関連はみられなかった。本研究では半数以上の被検査者がT=0を示した。このことは、高橋・高橋・西尾 (1998) の見解と一致している。しかし、愛着不安・愛着回避においても濃淡材質反応 (T) との関連は見出されず、岩佐 (2011) の研究結果とは一致しなかった。

本研究の結果の要因として最頻出値が0だったことが要因であると考えられるが、その他に岩佐 (2011) はRQ日本語版を用いている。ここで想定している関係性は親密な他者である。本研究で用いたECR-GOでは一般的他者を想定しているため、岩佐 (2011) の結果が再現されなかった可能性が考えられる。

(3) 愛着スタイルとロールシャッハ反応の特徴

愛着不安・愛着回避の各高・低群において特徴的なロールシャッハ変数を Table 7 に示す。表にはU検定で有意差が求められた変数を掲載した。また本研究のデータの参考に西尾・高橋・高橋 (2017) の日本の正常成人の中央値を載せている。

Table 7 愛着不安・愛着回避において特徴的なロールシャッハ変数

	変数	高群	低群	高橋ら (2017)	効果量 (r)
愛着不安	DQ+	8	5	5	.32
	YF	1	0	なし	.39
	R	23	29.5	22	.35
	D	3	9.5	8	.4
	Dd	4	8.5	2	.52
	S	1	4	3	.44
	FQu	6	10	4	.35
愛着回避	Zd	-8.5	-0.25	-2	.46
	Afr	0.4	0.5	0.45	.34
	Hd	1	2.5	1	.5
	An	0	1	0	.38
	Sc	0	1	0	.35
	PHR	3	4	2	.41

愛着不安高群では、DQ+, YF の2つの変数が高いという結果になった。YF の高さからは不安の高さが、DQ+ からは組織化や熟考する傾向の強さが

推測される。Table 2 の相関研究から愛着不安と Fr, 3r+(2)/R が負の相関関係と MOR が正の相関関係であった。これらは自己概念に関する変数である。一般他者を想定した愛着不安は、他者が自分から離れていく不安 (孤独への不安) や他者から大切に思われていない自己イメージへの恐れが質問項目からうかがえる。愛着不安高群のロールシャッハ変数において自己概念とそれにまつわる不安や刺激を統合しようとする傾向がスコアから推測できる。つまり、孤独や低い自己概念と見捨てられ不安への反応形成として過剰適応する対人様式を推定することができる。

愛着回避では多くのロールシャッハ変数との関連が認められる結果となった。愛着回避高群では D, S, Zd が低いことが特徴的であった。Zd ≤ -7.5 の場合は刺激を十分に検討せずに、課題に積極的に働きかけず、刺激処理を場当たりに早く処理していることを示す (高橋・高橋・西尾, 2001)。D は私の都合で切り取った「私が見えた部分」を指し (小沢, 1979), S は図と地の反転させることから適度な数値の場合は自己主張などの傾向を示す (八尋, 1993)。逆に愛着回避低群に視点を移すと、R, Dd, FQu, Afr, Hd, An, Sc, PHR のスコアが高かった。これらの変数をまとめると愛着回避低群は、多少逸脱した反応もみられるが全体としては領域を分割して個性的な反応を多く産出するスタイルといえる。ECR-GO による一般的他者による愛着回避は、他者との対人関係を持つことに対する抵抗感であり、なるべく対人関係に距離を置こうとする行動特性が質問項目に示されている。愛着回避高群のロールシャッハ変数において、検査課題に受動的でかつ加工された反応を産出しない態度がうかがえ、結果的に個性の少ない無難な反応になりやすいと推測される。そこから、環境に関わらない、あるいはコミットしない (自己主張しない) 慎重な対人様式を推定することができる。相関分析の結果からも愛着回避は被検査者の反応内容や構えにおける自由性の硬直と緩和の軸で考えることもできる。

(4) おわりに

本研究では、愛着スタイルとロールシャッハ変数との関連を検討し、以下の行動特性が推測できた。ECR-GO における愛着不安は対人関係における自己概念とそれに伴う不安や刺激を複雑に統合しようとする過剰適応の傾向が、愛着回避は検査に対して受

動的に構え、かつ個性的な加工された反応を控える (コミットしない) 傾向が推測された。

今回、先行研究と本研究のロールシャッハ反応の違いについて想定する他者の対人距離の差が両者の違いをもたらしたのではないかと考察した。今後は愛着スタイルをロールシャッハ反応の違いが文化差からか愛着スタイルが想定する他者の違いからか、年齢層の違い (成人と青年) からもたらされるかを改めて検証する必要があるだろう。

(注)

Berant et al. (2005) によれば一次的対処ストラテジーは安定した愛着対象から慰めとサポートを求め方であり、二次的対処ストラテジーは愛着対象が利用可能ではない状況で結果的に生じる不安を対処する試みである。二次的対処ストラテジーは、広範な精神内界および対人関係の特徴を暗に示し、愛着や脅威に関連する事象に対する個人の心理的反応を示すという。

謝辞

本論文は、筆者 (後藤) が2019年3月に中京大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を筆者らが再分析を行ったものである。本研究の質問紙調査や二次調査に快くご協力いただいた研究参加者の方々、また日々の議論を通じて多くのご意見やご示唆をいただいた院生の皆様に心から感謝いたします。

引用文献

- Bartholomew, K., Horowitz, L. M. (1991). Attachment Styles Among Young Adults: A Test of a Four-Category Model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61 (2), 226-244.
- Berant, E., Mikulincer, M., Shaver, P. R. & Segal, Y. (2005). Rorschach Correlates of Self-Reported Attachment Dimensions: Dynamic Manifestations of Hyperactivating and Deactivating Strategies. *Journal of Personality Assessment*, 84 (1), 70-81.
- Bifulco, A., Thomas, G. (2017). Understanding Adult Attachment in Family Relationship. (アタッチメント・スタイル面接の理論と実践 家族の見立て・ケア・介入 吉田敬子・林もも子・池田真理監訳 金剛出版)
- Bowlby, J. (1973). Attachment and Loss. Vol. 2. Separation Anxiety and Anger, New York Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 1977 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1981). Attachment and Loss. Vol. 3. Loss, New York Basic Books. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳 1977 母子関係の理論 III 愛情喪失 岩崎学術出版社)
- Cassella, M. J. (2009). The Rorschach Texture Response: A Construct Validation Study Using Attachment Theory. *Journal of Personality Assessment*, 91 (6), 601-610.
- Exner, J. E. (1995). Rorschach Form Quality Pocket Guide. Rorschach Workshops. (中村紀子・店網永美子・丸山香訳 2002 ロールシャッハ形態水準ポケットガイド (改訂版第3版) エクスナー・ジャパン・アンシエイツ)
- 古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価. *心理学研究* 87 (3), 303-313.
- 岩佐和典 (2011). 成人愛着理論からみたロールシャッハ材質反応の産出過程に関する研究. 筑波大学博士学位論文
- 川森美保 (2012). アタッチメントの側面から見た適応的な依存とは. *立教大学臨床心理学研究* 6, 19-29.
- Klopfer, B., Kirkner, F., Wisham, W., & Baker, G. (1951). Rorschach prognostic rating scale. *Journal of Projective techniques*, 15, 425-428.
- 金政裕司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望—現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは—. *対人社会心理学研究* 3, 73-84.
- 今野義孝・吉川延代 (2016). 愛着スタイルと自尊感情との関連性—身体感覚への態度, マインドフルネス, 反すう, レジリエンスの媒介効果—, *人間科学研究文科大学人間科学部* (38), 137-148.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2003). The attachment behavioral system in adulthood: Activation, psychodynamics, and interpersonal processes. *Advances in experimental social psychology*, 35, 53-152.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討, *九州大学心理学研究* (5), 19-27.
- 西尾博行・高橋依子・高橋雅春 (2017). ロールシャッハ・テスト統計集—数値の比較検討と解釈に役立つ変数データ, 金剛出版
- 小沢牧子 (1979). 全体反応とは: 知能観・発達観との関連. *ロールシャッハ研究*, 21, 125-135.
- 空井健三 (1990). ロールシャッハ・テスト, 土居建郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏編, 異常心理学講座8 テストと診断, みすず書房, pp. 72-118.
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (1998). 包括システムによるロールシャッハ解釈入門, 金剛出版
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2002). ロールシャッハ形態水準表—包括システムのわが国への適応, 金剛出版
- 八尋華那雄 (1993). ロールシャッハ・テストのエッセンス (8) 解釈仮説. *心身医療* 5 (10), 1396-1401.